

複言語教育としての彝語教育

浅山 佳郎

Native language and Bilingual education in Liangshan-Yi Prefecture

ASAYAMA Yoshiro

This paper reports on bilingual education of the native language and Chinese in Liangshan-Yi Prefecture, Sichuan China. As far as rough observation, Yi-language is relatively close to Chinese, as it is related phylogenically. This makes it possible to predict that the native language of Yi-ethnic group may be dominated by the socially superior language, Chinese.

Same as the result of Liu Chenyu et.al. (2014) or Yoshikawa & Yamashita (2014), our research also reveals that the bilingual education in Liangshan-Yi Prefecture cannot be seen as well functioning. The reason for this is mainly the lack of teachers with native fluency of Yi-language and also the lack of teaching materials in Yi language, but at the root of that we should not overlook the fact that there has been increasing many children who are growing up with Chinese as their mother tongue, and the purpose of bilingual education has been changed to keep their original language for their identity. Furthermore, I want to point out that as far as comparing with the situation in Estonia, which is regarded as an example of comparatively successful multilingual education, the positioning of “common language”, it is Chinese in this case, in language policy and social language situation is the most important problem.

1 はじめに

本稿は、中国四川省の彝族自治州における言語教育について、母語との複言語教育という観点からの報告を行う。

ここに言う「母語との複言語教育」とは、いわゆる少数民族コミュニティの初等および中等教育において実施される言語教育のうち、自民族固有とみなす言語と共通言語の2言語を教育するものを指す¹。中国においては、少数民族の言語教育として、共通語である漢語（普通話）と各民族の言語の2言語を教育する「双語教育」が制度として行われている²。

本稿では、そのひとつとしての四川省の彝族自治州における複言語教育を観察するとともに、それを評価するための参照点として、英語とエストニア語で行われるエストニアにおける複言語教育を参考にしつつ、彝族自治州の民族言語教育が「成功」しているかどうかを考えたい³。

彝語とは、中国の四川・貴州・雲南の3省にまたがって居住する彝族（人口約900万⁴）の言語であり、一般的に以下のような位置づけをされる。

(1) Sino-Tibetan / Tibeto-Burman / Lolo-Burmese / Yi (Loloish)

かつては「Lolo」とも呼称されたが、現在は中国語による「Yi (彝)」という名称が使用される。さらにこの彝語は、1950年代の中国科学院による民族言語調査委以来、6つの方言に分けられる⁵。それらの方言間の開きは大きく、共通の語彙は20~50%とされ⁶、意志の疎通は困難であるとされる⁷。それらの方言のうち、「Nuosu (诺苏)」と呼称される北部方言が、政府によって彝語の標準形とされ、学校で正式に教育される唯一の彝語となっている⁸。

今回の調査対象としたのも、このNuosu彝語であり、Nuosu語が使用されている中心である四川省の涼山彝族自治州における複言語教育が対象となる。なおこの自治区におけるNuosu語の話者人口は、おおよそ200万人程度と見積もられる⁹。

彝語について特徴的なのは、彝文字という固有の文字を持っていることである。たとえば小学校2年生の「彝語文」の教科書の最初のページを掲げておく(図1)。ここには発音の補助として「彝語ピンイン」と呼称されるローマ字表記が加えられているほかは、彝語の固有の文字である彝文字が全面的に使用されており、漢字は見られない。

彝文字は、その成立については、象形や指事または部首の存在など漢字と似

るところがあるが、直接の関係は指摘できない¹⁰。古くから各地で使用されている文字は数千から1万に上るが、現代彝文字が、1974年に提案され、1980年から公式表記法として使用されている。この現代彝文字は、涼山自治州の方言に基づく756字と、中国語借用のための63字からなっており、「かな」同様の表音文字である¹¹。この文字の習得も初等教育における彝語教育の重要な要素のひとつである。

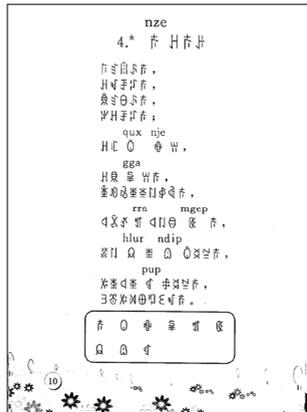


図1 罗尔体編 四川省二類模式義務教育課程標準実
験教科書『彝語文』二年級上冊 四川民族出版社

2 彝語と中国語

彝語の言語学的な特性については、西田（1999）やQiu（2013）や小門（2006）、および中部方言であるLahu語についてであるが、Matisoff（2003）が詳しい。以下、それらの資料を基に、複言語教育の対象である彝語と中国語という観点から、彝語について簡単に見ておく。

彝語の特性として、たとえば以下のような諸点を示すことが可能である。

- (2) a 音声は、CVを基本とする開音節で、声調をもつ
- b 形態的には活用をもたず、分析的言語であり、接語が多用され複合を起こす
- c 類別詞（助数詞）があり、数を示すときには必須となる
- d 主要部が後置されて、基本語順がSOVとなる

こうした指摘はかなりおおまかなもので、彝語自体の分析にはそれほど有益ではない。ただ漠然とではあるが、中国語と彝語との距離を考えるための参考として取り上げてみる。(2a) の開音節で声調をもつという特徴は、中国語が末尾子音をもつCVCであるという点ではやや異なるが、現代標準中国語である普通話では末尾子音は「n」と「ng」のみであるから、その開きは大きくはない。それを除く基本的な音節構成と固有の声調という点では、比較的中國語と近似すると考えることもできる¹²。

形態的に、彝語には声調、子音、母音の交代などで文法関係を示す屈折的な要素も見られるが、基本的には、(2b) で指摘するように、中国語と近似する分析的言語である。小門 (2006) によれば、否定やアスペクトやエビデンシャリティ、さらには程度や範囲に関する情報までが、動詞への接語によって表示されるとする¹³。ただし後述するように、SOV語順であり、動詞へ後接する接語が複数連続するなど、中国語のいわゆる「助辞」類とはやや異なる点もある。

語彙的には、基本語に単音節の単語が多く見られる。ただし現代中国語の単語が複音節化しているように、彝語の単語も相当数が複音節である。彝語は、名詞に格変化をもたず、動詞も大きな活用をもたないので、中国語からの借用語が入りやすい¹⁴。特に (2c) の類別詞については、「この先生」を意味する彝語と中国語を並べると、以下ようになる。なお、彝語については、彝語のピンインを使用し、中国語についても漢語ピンインを使用して表示する。

- | | | | | |
|-----|---|---------|---------|-------------|
| (3) | a | hmatmop | cyx | ma |
| | | 先生 | 指示詞 | 類別詞 |
| | b | zhe (这) | wei (位) | laoshi (老师) |
| | | 指示詞 | 類別詞 | 先生 |

類別詞が数表示の助数詞としてだけでなく、このように指示詞と共起する点でも、語順は異なるが、中国語と近似する。

統語的には、彝語は主要部後置言語なので、語順はSOVとなる¹⁵。よって動詞への接語は「V」に後置されて、複数の要素が連続しうる。

- | | | | | | | | |
|-----|-----------------------|---------|------|------|------|-------|------|
| (4) | cy | ggaxshu | ggex | ap | jjip | daqix | ox. |
| | 彼 | 歩く | [可能] | [否定] | | [様態] | [実現] |
| | 彼はほとんど歩けないようになってしまった。 | | | | | | |

この例では、「ggex jjip」が2語で可能の意味を示し、その中間に「ap」という否定の語が挿入されて、さらにその後ろに「ほとんど」という状態の意味を示す「daqix」があり、最後に実現性をしめす「ox」が置かれている。こうした文法的な機能語の連続は、中国語とはやや異質である。

こうした諸点からおおまかに観察する限り、彝語は、系統論的にも関係づけられるように、中国語と比較的近い言語である。類型論的には、語順のように、異なるところもあるが、彝語が中国語と近似性を示すことは、2言語の学習を比較的容易にする可能性があると同時に、社会的に優越する言語によってマイナーとされる母語が覆われてしまう可能性もあることを予想させる。

3 彝語の教育

中国における複言語教育政策は、基本的に中国語と民族固有言語を平等に扱おうとするものである。その方策として、初等教育から中等教育まで2種類の制度を走らせている。「タイプ1（一類モード）」と呼称される教育制度と「タイプ2（二類モード）」と呼称される制度である。前者のタイプ1は、彝語が学校での使用言語であり、中国語が言語としての学習言語となる。後者のタイプ2は、その逆に、中国語が学校での使用言語であり、彝語が言語としての学習言語となる¹⁶。

すなわち、タイプ1では、学校での使用言語が民族言語である彝語であるから、数学や科学や歴史といったその他の教科も彝語で教授され、いわゆる日本の教育制度下の「国語」に相当する科目として、彝語の「語文」科が置かれる。中国語はもう1つの言語科目となる。これに対してタイプ2では、中国語ですべての教科が教授され、「語文」科は中国語となり、彝語がもう1つの言語科目となる。

しかし実際のところでは、学校言語としての彝語の維持は、種々の理由で困難であり、タイプ1の制度をもつ学校は少ない。Liu Chenyuら（2014）によれば、それぞれのタイプで学習する生徒数は、彼らが調査した2009年段階で、以下のような数値となる¹⁷。

(5)	タイプ1	7,000人
	タイプ2	250,000人

我々が見学した西昌市郊外の安哈彝族小学校でも、小学校1年生の時間割は

以下のものであった。網掛で示した2時間が彝語の授業である¹⁸。

(6)	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
1時間目		語文	数学	語文	語文
2時間目	語文	語文	語文	語文	語文
3時間目	数学	数学	彝語	数学	彝語
4時間目	生命安全	書道	音楽	体育	美術
5時間目	音楽				道徳
6時間目	体育	体育	体育	道徳	

表中の「語文」科は、先述したように、おおそ「国語」科に相当する科目であり、現代中国語の授業が行われる。この授業は週に8時間あり、漢字の書法を中心とする「書道」の授業と合わせると9時間となる。彝語の授業時間の4倍以上である。

この小学校はタイプ2の学校であるから、当然ではあるが、彝語の授業時間は少なく、その他の教科はすべて中国語が使用される。彝語の授業自体も、我々が参観した1年生のクラスでは、彝族の教員が、その発話の半分程度を中国語によっておこなうことで、授業を運営していた。授業内容も、彝語の発音の基礎であり、母語話者への、いわゆる「国語」教育というより、「外国語」教育に近い内容であった。

その理由として、今回の調査で意見交換を行った西昌学院教員養成系の教員は、以下の問題を指摘した。

- (7) a 各種の科目を、彝語によって授業することのできる教員の養成が追いついていない。
- b 各種の科目の彝語による教科書の整備が進んでいない。

西昌学院は、涼山彝族自治区の中心となる都市である西昌市にある大学であり、彝族の小中学校の教員養成を主たる任務としている。そこで把握されている問題が、如上の彝語による教育のための人的・物的資源の不足である。

我々が参観した学校のうち、このタイプ2の学校だけでなく、タイプ1とされる初等中等一貫教育の瓦爾中学校においても、その教員から、以下の問題が指摘される。

- (8) 彝語の授業と高校での数学の授業以外は、全て中国語による授業であり、タイプ2の学校とほとんど変わらない。

このことは、彝語を中心とすべきタイプ1の学校も、その学校数が少ないだけでなく、教育内容としても、本来のタイプ1としての目標に遠く及ばないことを意味する。

この事情はLiu et al. (2014) でも同様の内容として報告されている。そこでは彼らが調査した9つの学校すべてで、彝語の教育時間が中国語の教育時間に遠く及ばないことが示されている。以下はLiu Chenyuら (2014) に掲げる「The weekly class hours of the Yi language, Chinese and English in the nine sampled school」表を、必要と判断する所だけ抜き出して、日本語化したものである¹⁹。

(9)

言語	N	C	E	N	C	E	N	C	E
小学校	第1学年			第2学年			第3学年		
A小学	2	7	0	2	7	0	2	7	0
B小学	3	8	0	4	8	0	3	7	0
C小学	0	7	0	0	7	0	2	6	0
D小学	0	7	0	0	8	0	0	7	2
E小学	0	9	0	0	8	0	0	8	0
F小学	0	10	0	0	10	0	1	8	1
中学校	第1学年			第2学年			第3学年		
G中学／タイプ2	2	8	8	2	9	7	2	8	8
タイプ1	4	8	8	ナシ			ナシ		
H中学	3	9	9	3	8	8	3	8	7
I中学	1	6	7	1	5	6	0	6	6

おおよその状況を把握することを目的とするので、小学校、中等学校それぞれで第1学年から第3学年のみを取り出した。最上欄の「言語」の「N」はNuosu語、すなわち彝語の授業を指し、「C」と「E」は、それぞれ中国語と英語の授業を意味する。数値は1週当たりの授業時間数である。

この数値を見ると、G中学校のタイプ1クラスでさえ、彝語が4時間なのに対して、中国語と英語は8時間教授されている。彝族地区の小学校でも、彝語

がまったく教授されていない学校が6校中に2校もある。我々の調査での把握と同様に、彝語教育が、必ずしも複言語教育として充実した位置にあるのではないことが示される。

今回の調査では、彝族自治区での彝語との「双語教育」制度の推進役でもあった西昌市前教育局長と意見交換をする機会があった。その中で前教育局長は以下のことを指摘する。

- (10) 当初は中国語のできない彝族子弟のための教育という意味が強かったが、現在では母語母文化の維持および発展のための教育という色彩が強くなっている。

これは、本来は、彝語を完全な母語とする子供たちが存在し、タイプ1の学校の設置目的が、そうした生徒たちへの基礎教育と中国語教育にあったものが、実際は、中国語を母語として成長している子供たちが多く、その目的が無用になりつつあること、逆に、学校教育の目的が、彝族の子供たちに不足しはじめている彝語と彝族文化の継承となっていることを示すものである。

4 エストニア語とエストニアにおける言語教育

エストニア語は、バルト3国のひとつであるエストニアで使用されている言語である。エストニア国の人口は約130万人であり、そのうちの70%に相当する90万人弱がエストニア語を母語とする²⁰。1991年に再独立をするまでソヴィエトの一部であり、ロシア語が公用語であった。現在もロシア語話者が多数居住し、ロシア語も多く通用する。

エストニアが長くドイツの影響下にあり、またその後ソヴィエトの一部となり、現在は多言語社会としてのEUに属するという状況から、エストニア人は複数言語の使用が多い。エストニア語を母語とする人について見ても、

- | | |
|---------------------|-------|
| (11) 1 外国語を話すことができる | 約27万人 |
| 2 外国語を話すことができる | 約21万人 |
| 3 外国語以上を話すことができる | 約18万人 |

という状況にある²¹。

エストニア語の言語学的な特性については、松村（1996）、Viitso（1998）、

Viitso (2003) などに詳しい。ウラル系統の言語であり、一般的に以下のように位置づけられる。

(12) Uralic / Finno-Ugric / Balto-Fin / Estonian

上掲の資料をもとにして、彝語と同様におおまかに特性を挙げておく。

- (13) a 音節は閉音節で、母音及び子音には短、長、超長の3段階の区別がある。
 b 形態的には、動詞と名詞が語形変化を起こし、特に名詞は14格をもつ。
 c 語彙的にはフィン・ウゴル祖語に遡るもののほかに、ロシア語ドイツ語などからの借用語も多い。
 d 統語的には、主要部前置でSVO語順であるが、後置詞も多用され、動詞が句末に置かれることもあるように、談話的な自由度が高い。

総じてみると、現代のエストニアでの複言語教育の主な対象となる英語と比べた場合、それほどの近似性を示さない。中国語と彝語の関係と比較して言えば、学習には一定の困難が予想されるが、言語的に同化する可能性は高くないと見ることができる。

エストニアでは、ソヴィエト時代から複言語教育が行われてきた。現在では、小学校から大学までエストニア語による教育が整備されているが²²、大学では、エストニア語による授業と並行して英語による授業も受講可能である²³。これはエストニアにおける外国語教育としての英語教育が、一定程度に成功しているからと見ることができる。エストニアにおける英語教育は、現在、小学校1学年または2学年から開始されており、高校卒業までに相応の英語力を身につけることができる²⁴。

英語の外国語教育としての成功は、同時にエストニア語が母語としてなされる教育も成功していることを意味する。エストニアでは、初等教育から基本的にエストニア語を使用言語としてさまざまな教科が教育されると同時に、大学入学試験でも、エストニア語が必須とされる²⁵。そうした教育制度をとりまく環境としても、TVや新聞、出版などメディアもエストニア語によるものが多様かつ大量に準備されている²⁶。

5 おわりに

小中学校および母語授業の数、中等教育までおよび大学教育での使用言語、さまざまな教科の教科書、といった側面から見る限り、彝族自治州では、中国語教育が優越しており、彝語教育は十分な成果を上げているとは言い難い。彝語は危機言語ではないが、その維持に困難が生じている状況にあると見ることができる。

同様の観点から見れば、エストニアでは、エストニア語教育が優越しており、同時に英語というふたつめの言語教育も比較的的成功していると見ることができる。人口で言えば、彝語を北部方言地区に限定したとしても、エストニア語に対してNuosu彝語の話者人口は2倍半にのぼる。このことは、話者人口が母語との複言語教育を支持する最大の要素なのではないことを示す。

経済的な問題や政治的な組織の管理の問題など、母語との複言語教育に関わる要素はさまざまにあると思われる。ただここでは1点を指摘するのみにしておきたい。それは民族固有の母語をとりまく言語環境における「共通語」の地位の差という問題である。

彝語という民族の言語をとりまいているのは、中国語であるが、それは現在の中国社会では中華民族というもうひとつ「別の」民族の言語と把握される。この別の民族言語が、彝族社会にとっては自らが位置する社会環境の中での「共通語」として存在しており、その習得が社会的には必要となる。

これに対して、エストニア語をとりまいている英語は、EUにおける単なる「共通語」であり、エストニアの周辺バルト諸国、ポーランド、ドイツ、フィンランド、スウェーデンなどにとっても、母語ではない「外国語」でしかない。そういう意味で英語は、欧州大陸では非民族語としての位置にある。

このことは、さらに共通語である英語と自らの言語であるエストニア語の関係にも影響する。以下は、あくまでもエストニアで知り合った友人個人の感想ではあるが、彼が言うには、エストニア人は、言語を除外すれば周囲の他の国の人々、特に東ヨーロッパ諸国の人々と差を感じないという。それをある種の普遍的な人間観と見るならば、エストニア外部の世界における非民族語としての英語が共通語であることが、そうした普遍性によって支持されていることになる。そして自分たちの言語は、そうした「普遍性＝共通性」ともいえるべき環境の中にある独自性の根拠であるから、複言語世界において、共通語である英語と固有語であるエストニア語は対立しない。

これに対して、彝語が置かれている状況は異なる。本来は中国語も多様な中

国語系「方言」の中における非固有的な「共通語」としての性格をもちうるはずのものである。しかし実際は、「中華民族」の固有語としての性格を付与される。よって彝語と中国語の関係は、エストニア語と英語とのそれとは異なり、2つの民族語間の対峙的なものとなる。やはり涼山自治区での調査で知り合った友人は、漢族の学生たちとの競争的あるいは対立的な関係に言及した。

言語が置かれるそうした社会的環境と複言語教育、換言すれば複言語習得との、どちらが原因でどちらが結果であるかは明確ではない。おそらく相互的な作用であろうと思われる。

以上、本稿は最後の「おわりに」に述べたことを論証する方法をもたないが、彝族自治区における複言語教育についての報告と、それを理解するための視点の整理をおこなった。

-
- 1 少数民族についても、どの方言を「民族固有」の言語とみなすかという問題は、容易に決定しがたい。中国におけるこの問題の言語政策的な課題については、早く周耀文(1985)、同(1993)が指摘する。
 - 2 中国政府教育部の公開する「“十二五”重大教育政策及名词解释」では、「民族地区双语教育是指依据《宪法》和有关法律规定、国家在少数民族地区学校和民族学校中、对少数民族学生进行以少数民族语言和国家通用语言作为教学语言的教育教学活动。」とされる。
http://www.moe.gov.cn/jyb_xwfb/moe_2082/s6236/s6811/201209/t20120903_141514.html
 - 3 比較的に成功している例としてよくあげられるのが中国東北地区の朝鮮族自治区における「双語教育」である。たとえば俞永虎(2009)など。
 - 4 中国政府の2010年の第6回人口調査統計資料によれば、彝族の人口は、8,714,393人となっている。<http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm>
 - 5 朱文旭(2005)、p.52
 - 6 朱文旭(2005)、pp.34-35
 - 7 乌尼乌且・王秀英(2003) p.2や福田和展(2011) p.15など
 - 8 1980年に國務院が「規範彝文方案」を批准したことによって、彝語の北部方言のひとつである聖乍方言が、発音および標記について「標準」彝語とされた。
 - 9 「涼山州2010年第六次全国人口普查主要数据公报」によれば、この地区の彝族人口は2,226,755名である。ただし各地の彝族の若年齢層が涼山地区での彝語教育に参加することも見られ、Nuosu彝語の標準語化が進んでいるとすれば、Nuosu彝語の話者人口はさらに拡大する可能性がある。
 - 10 彝文字の発生および漢字との関係については、孔祥卿・史建偉(2010)や阿余鉄日(2009)などに詳しい。
 - 11 彝文字制定に関しては、福田(2011)のpp.46-66に簡潔なまとめがある。
 - 12 彝語の音声については、西田(1999)が簡潔で要を得るが、また彝語研究編委会(1992)

なども詳しい。

- 13 動詞の接語については、小門（2006）pp.15-31およびpp.47-59が詳しい。ただし小門はそうした要素を、「動詞後綴＝動詞接尾辞」と「助動詞」に分項して記述する。ここではそれらを、とりあえず一括して「接語」としてくくっておくが、記述の便宜のためであり、小門の分類を否定するものではない。
- 14 烏尼乌且・王秀英（2003）は、「彝語缺的新词术语、难以准确翻译的、根据使用习惯、主要从汉语中借用。在语音的处理上班、早期借词按彝语习惯读音书写、近期借词、应尽量用汉语普通话相当的字母书写。音译借词使用的彝文、应照此原则、逐步统一固定。」と述べる。
- 15 Lolo-BurmeseのSOV語順とその地理的な分布については、Dryer（2003）が詳しい。
- 16 涼山地区の彝語と中国語の「双語教育」およびそこで採用されているタイプ1（一類模式）とタイプ2（二類模式）の詳細と、その社会的背景については、吉川、山下（2014）が詳しい。
- 17 Liu Chenyuら（2014）に「The number of Yi students choosing the second model jumped over four-fold from 62,233 in 1997 to 254,159 in 2009, while those choosing the first model fluctuated from 6046 in 1990 to 8343 in 1997 to 6988 in 2009」と述べる（p.151）。
- 18 当該小学校で渡された時間割表コピーを日本語に翻訳して示す。
- 19 Liu et al.（2014）, p.154
- 20 エストニア政府の2011年の人口調査（<https://www.stat.ee/population-census>）による。そこでは全人口は1,294,455人、うちエストニア語を母語とするのは、手話を含めて887,364人とされる。なおロシア語を母語とする人口が383,118である。
- 21 同上の人口調査による。
- 22 やはり同上のエストニア政府による社会生活統計によると、エストニアの初等、中等教育機関362校のうち、エストニア語が使用言語となっているのは254校、で70%程度となる。57校がロシア語を中心とする他の言語を使用言語とする学校であり51がエストニア語と他の言語を混在させる学校である。http://pub.stat.ee/px-web.2001/I_databas/Social_life/databasetree.aspを参照のこと。
- 23 たとえばエストニアのTartu大学では、そのHPで、「Studies at the University of Tartu take place in Estonian and English languages. The official teaching language for most Bachelor's programmes is Estonian; however, currently there are three programmes available fully in English: Business Administration / Science and Technology / Medicine」とある。（<https://www.ut.ee/en/prospective-students/bachelors-studies>）
- 24 2015年のEF EPI では、国別の英語力として7位とされる。その精度には疑念もありうるが、とりあえずの目安として参考としておく。https://www.ef.com/__/~/media/centralescom/epi/downloads/full-reports/v5/ef-epi-2015-english.pdf
- 25 非エストニア語母語話者の場合は、第2言語としてのエストニア語の試験が必須となる。<https://www.hm.ee/en/activities/external-evaluation/state-examinations>
- 26 注22の統計によれば、2016年のエストニア語による出版点数は3,140であり、そのうち1,696点がエストニア語オリジナルのものである。またエストニア語以外の言語による出版点数は2,198となる。

参考文献

- 小泉保. 2009. 『エストニア語入門』 大学書林
- 小門典夫. 2006. 『涼山彝語詞類研究』. 四川民族出版社
- 小森宏美. 2008. 「だれの言語権か—エストニアとラトヴィアの場合」. 『月刊言語』 37 (2)
- 西田龍夫. 1999. 「ロロ語」 (『言語学大辞典 第4巻』 三省堂)
- 福田和展. 2011. 『涼山彝族の言語と文字』. 三重大学出版会
- 松村一登. 1996. 「エストニア語」 (『言語学大辞典 第1巻』 三省堂)
- 吉川龍生、山下一夫. 2014. 「中国四川省涼山における彝族の複言語教育」. 『慶應義塾外国語教育研究』 11
- Dryer, Matthew S.. 2003. Word order in Sino-Tibetan languages from a typological and geographical perspective. In Thurgood, G et al (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. Routledge
- Liu Chenyu et al. 2014. A Multi-case Investigation into Trilingualism and Trilingual Education in Liangshan Yi Autonomous Prefecture. Feng, A. & Adamson, B. (eds.) *Trilingualism in Education in China*. Springer
- Matisoff, James A.. 2003. Lahu. In Thurgood, G et al (eds.) *The Sino-Tibetan Languages*. Routledge
- Qiu-Fuyuan. 2013. *Subgrouping of Nisoic (Yi) Languages*. Lambert
- Mart Rannut et al. 2009. *Language Politics and Practice in the Baltic States*. Tallinn University Press
- Vitso, Tiit-Rein. 1998. Estonian. In Abondolo, Daniel (eds). *The Uralic Languages*. Routledge
- Vitso, Tiit-Rein. 2003. Structure of the Estonian Language. In Erelt, Mati (eds). *Estonian Language*. Linguistica Uralica
- Erelt, Mati. Study of Estonia. In Erelt, Mati (eds). *Estonian Language 2nd edition*. Linguistica Uralica
- 阿余鉄日 (2009). 『彝文字形探源』. 四川民族出版社
- 蔡华. 2000. 「彝族双语教育两类模式大学生社会适应能力调查报告」. 『西南民族学院学报(哲学社会科学版)』 2000年3期
- 孔祥卿・史建偉 (2010). 『汉字与彝文的比较研究』. 南开大学出版社
- 刘诚芳. 2000. 「彝族双语教育两类模式的大学生人格特征的比较研究」. 『西南民族学院学报(哲学社会科学版)』 2000年1期
- 普忠良. 1999. 「彝族双语教育模式」. 『中国民族教育』 1999年5期
- 滕星. 2000. 「凉山彝族社区学校实施彝汉双语教育的必要性」. 『民族教育研究』 2000年1期
- 乌尼乌且・王秀英. 2003. 『现代彝语』. 四川民族出版社
- 彝语研究编委会. 1992. 『彝语研究』. 四川民族出版社
- 俞永虎. 2009. 「构建符合实际的双语课程体系和富有特色的双语教育模式—吉林省延边州朝鲜族双语教育发展60年」. 『中国民族教育』 2009年10期
- 张余蓉・余惠邦・马锦卫. 1992. 「四川彝族地区双语教育现状及其发展前景」. 『西南民族学院学报(哲学社会科学版)』 1992年6期
- 周耀文. 1985. 「关于我国各民族语言使用和发展方面的几个问题」. 『民族语文』 1985年4期. 『中

- 国少数民族語文使用研究』. 1995. 中国社会科学出版社に所収
- 周耀文. 1985. 「中国南方少数民族使用方言文字的語言依据和社会依据」. 『民族研究』
1993年1期. 『中国少数民族語文使用研究』. 1995. 中国社会科学出版社に所収
- 朱文旭. 2005. 『彝語方言学』. 中央民族大学出版社